

第48回 全日本中学生水の作文コンクール 和歌山県入賞作品集

水について考える

和歌山県

「あいさつ」

水は、あらゆる生命の根源であり、私たちの暮らしや産業活動を支える限りある貴重な資源です。近年では、世界的な渇水や洪水が頻発し、水利用の安定性、安全で良質な水資源の確保が重要な課題となっています。

こうしたことから、国においては、水を共有の財産と位置づけるとともに、健全な水循環の重要性について、国民の理解を深めるため、毎年八月一日を「水の日」と定め、様々な関連行事が行われています。

和歌山県では、この一環として、中学生を対象に、昭和五十四年から「全日本中学生水の作文コンクール」の和歌山県審査を実施しており、本年は、六五五編もの御応募をいただきました。

いずれも、「水について考える」というテーマにふさわしく、日々の生活の中で感じた水の重要性を表現したものや世界の水資源問題に目を向け、その課題について考察したものなど、様々な視点から水について考え、水への想いが表現されたすばらしい作品ばかりでした。

これらの中から、入賞作品十八編をこのたび作品集にまとめました。家庭や学校で御活用いただき、水への関心をさらに深めていただくことを願っています。

令和八年八月四日

和歌山県地域振興部長 赤坂 武彦

もくじ

優秀賞

たった一滴

開智中学校一年 伊藤 初唯

・
・
・
1

蛇口から流れる、終わりのない物語

和歌山信愛中学校二年 下間 衣桜

・
・
・
3

地球温暖化と水

和歌山県立田辺中学校二年 新垣 クリスタル アサヒ

・
・
・
5

入選

水がある嬉しさと幸せ

和歌山信愛中学校二年 浅野 莉乃

・
・
・
7

山と地球を守るヒーロー

和歌山信愛中学校二年 太田 叶

・
・
・
8

生き物のすみかとその環境

和歌山信愛中学校二年 大中 薫

・
・
・
9

AI技術と水の共生

和歌山県立向陽中学校二年 宮田 真衣

・
・
・
1 0

未来へ受け継ぐ水の恵み

近畿大学附属和歌山中学校一年 森脇 大智

・
・
・
1 1

水から教えてくれること

和歌山県立田辺中学校三年 岩本 佳樹

・
・
・

1 2

水のつながり

和歌山県立向陽中学校二年 上松 頼幸

・
・
・

1 3

水の大切さを感じた時

開 智 中 学 校 二年 岡 凜太郎

・
・
・

1 4

日本の水と世界の水

和歌山県立向陽中学校二年 木村 優月

・
・
・

1 5

日々の水への感謝

和歌山県立田辺中学校二年 島本 彩葉

・
・
・

1 6

当たり前を大切に

和歌山県立田辺中学校二年 竹内 日和乃

・
・
・

1 7

産業と水

和歌山県立田辺中学校二年 中山 明衣

・
・
・

1 8

私が知った水の大切さ

和歌山県立向陽中学校二年 蓑屋 風夏

・
・
・

1 9

水の大切さ

近畿大学附属和歌山中学校二年 宮崎 紗那

・
・
・

2 0

水の大切さと私たちの生活

海南市立亀川中学校三年 渡邊 夏梨

・
・
・

2 1

（掲載順序は五十音順です。）

優 秀 賞

たった一滴

開智中学校 一年

いとう 初唯
伊藤

蛇口をひねれば、無色透明な水が勢いよく流れ出す。喉を潤し、体を洗い、日々の生活を支えてくれている水。私にとってそれは、あまりに身近で、空気と同じように「あって当たり前」のものだった。しかし、人間の体は約六十パーセント以上が水でできていると言う。そう考えると、私たちという存在は、「個体」ではなく、一時の形を保った「水の器」に過ぎるのではないだろうか。そんな、不思議な感覚に捕れたことがある。

私たちは普段、自分と外の世界を区別して生きている。しかし私が今日飲んだ水は数時間後には、体の一部となり、私の思

考や行動を支える力となる。そしてまた、いつかは汗や吐息となり、外の世界へ出ていき、やがて誰かの、あるいは何かの命を潤す一滴となるだろう。私たちの体を流れる水は、決して自分だけのものではない。それは地球という大きな生命体を巡り続ける「命のバトン」なのだ。

現代の私たちは、水を「外にある資源」として扱っている。しかし、水が汚れるということは、回りに回って自分自身の内側を汚すということと同じである。私たちが海や川を汚染するとき、それは地球という大きな体に毒を回しているだけでなく、自分という存在を傷つけるということにもなる。

「人間と水」の関係は利用する側とされる側という対立したものではない。私たちは水そのものであり、水は私たちそのものなのだ。鏡に映る自分を見つめるとき、その瞳の奥にかつて山を流れ、雲や雨になって、旅をしてきた水が、今体の中にある。そう想像すると自然は遠くにある「守るべきもの」ではなく、自分の体の一部なんだという実感が湧いてくる。私と世界は、一滴の水を通して、一つに結ばれているのだ。

この繋がりは場所だけでなく、「時間」も超えていく。私は今、大切に使ったたった一滴の水は、何十年後の未来で、誰かの命を繋ぐ水になるかもしれない。逆に言えば、今私たちが

この水の循環を壊せば未来の子供達は「自分自身」を持つことも難しくなるかもしれない。水を通して、私たちはまだ見ぬ人々の運命もともにしているのだ。

「たった一滴で？」と思う人もいるかもしれない。しかし、そのたった一滴の水でも、大切にすることとは、自分自身の命を大切にすることや、未来の子供達の命を守ることになり自分の周りの人を守ることにも繋がるのだ。そして他者や他の生命と繋がっているということを認めることでもある。

私はこの「体内の川」がいつまでもきれいで、澄んだ音を立てられるような、そんな生き方をしていきたい。今、当たり前のように使えているきれいで無色透明な水に感謝し、自らの中にある、小さな海を汚さず清らかなまま次の未来へ繋いでいくこと。それが、水として生きる私たちの最も強く、誇らしい責任で未来を繋ぐために必要なことなのだと思う。

優 秀 賞

蛇口から流れる、 終わりのない物語

和歌山信愛中学校 二年

しも ま い お
下間 衣桜

のどがかわいて、台所で水を飲む。蛇口から出てくる、透明できれいな水。私たちはそれを、「新しい飲み物」だと考えていると思いますが、実はそうではありません。実は、地球にある水の全体の量は、大むかしの恐竜がいた時代も、エジプトでピラミッドが建てられた時代も、そして今も、ほとんど変わってないのだそうです。つまり、今私が見こんだ水の中には、もしかしたらクレオパトラが流したなみだや、数億年前の海でおおいでいた首長竜の体内にあった水が、まざっているかもしれません。そう考えた瞬間、ただの「飲み物」だった水が、地球の歴史を運ぶ「タイムマシン」のよ

うに感じられます。

水はすがたを変え、場所を変え、永遠に旅を続けています。空にのぼって雲になり、雨になって地面にふり注ぎます。そして、地下深くの固い岩の間を、何百年もかけてゆっくり通りぬけ、川になって海へと還ります。このサイクルの中で、水は地球に生きているすべての命を「繋ぐ」役割を果たしています。私が今日使った洗顔の水は、数ヶ月後には蒸発して、どこか遠い国の畑を潤す雨になるかもしれません。水に国境はない。私たちが「自分のもの」だと思っている水は、本当は地球に生きるみんなの「宝物」です。それはまるで、地球という一つの大きな体の中を流れる「血液」のように、ぐるぐると回って命を支えているのです。

でも、今の私たちは、水のこの「つながり」を忘れがちです。水は、蛇口をひねればすぐに出てくるし、コンビニに行けばいつでも買えます。便利になった反面、水が持つ「物語」を感じる力は弱まっています。よごれた水をそのまま流したとき、それはただ目の前から消えてなくなるものではありません。川や海へもどって、また地球をぐるぐる回る循環の中に、「負の記憶」を刻むことになります。最近ニュースで聞く「マイクロプラスチック」や、体に良くない「薬品」など

で水をよごすことは、地球という大きな体の血液に「毒」をまぜるのと同じことです。そしてそのよごれは、長い時間をかけて地球をめぐり、何十年もあとの未来に生きるだれかのコップに届いてしまうかもしれません。私たちは、未来の子供たちが飲むはずの大切な水を、今、よごしてしまっているのかもしれないのです。

もし水に意識があるとしたら、今の私たち人間を見てどう思っているでしょうか。大きなダムでせき止められたり、コンクリートの細いみぞの中を走らされたり、たくさん洗剤をまぜられたりしています。むかしのような自由な旅が、人間のつごうでバラバラにされて苦しんでいるかもしれません。私は、水をもっと「生き物」と同じように大切にすべきだと思います。節水をするのは、ただもったいないからという理由だけではありません。この一滴の水が、何億年もかけて旅をしてきたことに敬意を払うためです。一滴の水を大切にすることは、その水が見てきた「地球の長い歴史」を守ることと同じなのです。

作文を書くために、水のことをずっと考えていたら、私の体もまた壮大な循環の中の「中間地点」だということに気づきました。人間の体の約六十パーセントは水でできていま

す。私という存在は地球から一時的に水をかりて、今の自分の体を作っている器のような存在かもしれません。私がいつか大人になり一生を終える時、私の体の中にあつた水は、また自然の中へと還っていき、新しい旅を始めるでしょう。その時、私から還っていく水が、今よりも少しでもきれいで、未来に生まれてくる命にとって優しいものであつてほしい。そう願っています。蛇口から流れる水の音を聞きながら、私はこの終わりのない「水の物語」を次の世代へと美しくつないでいく責任があるのだと強く感じています。

優 秀 賞

地球温暖化と水

和歌山県立田辺中学校 二年

しんがき
新垣 クリスタル アサヒ

水は、ただの透明な液体だと思われがちだ。コップに注がれ、のどをうるおし、やがて忘れられる存在。でも本当は、水は記憶を持つ不思議なものではないかと考えることがある。昔の海を満たしていた水の粒は、形を変えながら、今も地球の中をめぐり続けている。雪になり、雨になり、川になり、人の体の中を通り、また空へ帰っていく。そのくり返しは、ただの自然の動きというより、何か意思のようなものがあるようにも感じられる。

もし水に心あるとしたら、今の地球の変化をどう見ている

のだろう。最近よく聞く地球温暖化という問題。気温が上がり、氷が解け、海の高さが上がっていく。それはただの数字の変化ではなく、水にとっては大きな出来事かもしれない。今まで安定していた氷という形は崩れ、海は広がり、雨の降り方も急に強くなったり、逆に全く降らなくなったりする。水は今、自分のあり方を大きく変えられているのではないか。

例えば、氷の中に閉じ込められていた一つ水を思い浮かべる。その水は長い間、動かずに静かな時間の中にあった。でも温暖化で氷が解けると、その水は急に外へ流れ出し、やがて海へとたどり着く。その流れは、ゆっくり目覚めるのではなく、急に起こされるようなものだ。そのとき水は何を感じるのだろうか。ただ流されるだけなのか、それとも何かを覚えていくのか。そんなことを考えると、水はただの物ではなく、地球の歴史を知る存在のようにも思えてくる。

さらに、人間の生活も水に大きく影響を与えている。町はコンクリートで覆われ、雨は地面に染み込み、一気に流されてしまう。川もまっすぐに整えられ、本来のゆったりした流れは失われている。人にとっては便利でも、水にとっては少し苦しい変化かもしれない。本来の流れを変えられた水は、どこかでバランスを崩してしまう。

地球温暖化は、ただ暑くなるだけの問題ではない。それは水の流れや形そのものを変えてしまう。水はもともと形を変えやすいが、その変わり方が急すぎると、世界は不安定になる。大きな雨や、長い間雨が降らないことなどは、そのバランスの崩れの表れとも言えるだろう。水が持っていた自然のリズムが乱れているのだ。

だからこそ、水をただ使うだけのものとして見るのではなく、その流れや動きに目を向けることが大切だと思う。水はいつもそばにあり、あまり気にされない存在だが、本当はとても大切で、壊れやすいバランスの上に成り立っている。

もし水が記憶を持つなら、今の地球の様子はどのように残っていくのだろう。解けていく水、変わっていく海、乱れる雨。それらは見えない形で積み重なっていくのかもしれない。そしてその変化は、いつか私たちの生活にも大きく関わってくる。

水は何も言わない。でも、確かに変わり続けている。その変化に気づき、どう向き合うかは、人間に委ねられている。透明で目立たない存在だからこそ、水のことを考えることは、地球の未来を考えることにつながるのではないだろうか。水は何も言わない。でも、確かに変わり続けている。その変化に気づ

き、どう向き合うかは、人間に委ねられている。透明で目立たない存在だからこそ、水のことを考えることは、地球の未来を考えることにつながるのではないだろうか。

水がある嬉しさと幸せ

和歌山信愛中学校 二年 浅野 莉乃 あさの りの

夏の体育館は、まるでサウナのような熱気に包まれている。バレーボールの練習中、床をけるたびに体中の水分が汗となつて噴き出し、ユニフォームが肌に張り付く。激しいラリーが続く中、喉はカラカラに乾き、呼吸をするたびに熱い空気が肺を焼くような感覚に陥る。頭の中にあるのは、ただ一つ。「水が飲みたい」という切実な願いだけだ。

ようやく訪れた休憩時間、私は吸い寄せられるように水筒へと手を伸ばす。キャップを開け、冷たく冷えた水を一気に喉へと流し込む。その瞬間、喉を通り抜けるひんやりとした刺激は、どんな高級な飲み物やご馳走よりも贅沢で、最高の幸せだと感じる。「生き返る」と思わず声が漏れるほど、渴いた細胞の一つひとつに潤いが染み渡り、体中にエネルギーが再充填されていくのがわかる。

この一杯の水があるだけで、沈みかけていた心と体に再び火が灯る。重かった足取りが軽くなり、またコートへ戻ってボールを追いかける勇気が湧いてくる。もし、この練習の最中に水がなかったら、私はきつと一步も動けなくなっていただろう。極限まで渴きを経験したとき、水という存在がいかに自分の生命を支えているか、その力強い愛おしさを心の底から実感するのだ。

しかし、私たちは普段、この「水がある」という奇跡を忘れがちである。蛇口をひねれば透明な水が勢いよく流れ出し、いつでも好きなだけ使うことができる。この当たり前前すぎる光景の中に、実はどれほど多くの支えと幸運が隠れているのかを考えることは少ない。

バレーの練習後の洗顔一つをとってもそうだ。火照った顔に当てる水の冷たさは、暑さでぼんやりしていた意識をシャキッと引き締め、心に安らぎを届けてくれる。練習で汚れた練習着を洗濯し、再び真っ白な状態で袖を通すことができるのも、すべて水のおかげである。さらに視点を広げてみれば、水の恩恵はスポーツの場だけにとどまらない。一日の終わりに湯船に身を沈めるときは、重力から解放されたような開放感を心に与えてくれる。温かいお湯が体全体を包み込み、蓄積した疲れをゆつくりと溶かしていく時間は、明日への活力を蓄えるための大切な時間だ。また、母が作ってくれる温かい味噌汁や、食卓に並ぶみずみずしい野菜、庭に咲く花々。私たちの暮らしを彩り、命を繋いでいるすべてのものの根源には、必ず水がある。

水がある。ただそれだけのことが、実は私たちの生活における幸福の確かな土台となっている。世界には、一杯の清潔な水を得るために何時間も歩かなければならない人々もいる。そうした現実を思いを馳せると、日本のこの恵まれた環境が、いかに貴重なものであるかに気づかされる。私たちはもっと、この透明で美しい存在に対して無邪気に、そして深く感謝を捧げてもいいはずだ。バレーの練習を通して学んだ「一滴の水のありがたみ」は、私の人生観を少しだけ変えてくれた。どんな辛い練習も、隣に水があるから乗り越えられる。どんなに疲れた一日も、水が癒してくれる。水がある嬉しさは、私が今ここで生きていられるという喜びそのものだ。

これから、この当たり前前の幸せを大切にしていきたい。無駄遣いをせず、感謝を込めて水と向き合うこと。それが、私の命を繋いでくれる水への恩返しだと思う。水がある。その幸せを噛み締めながら、私は今日もまた、元気にコートへ走り出していく。

山と地球を守るヒーロー

和歌山信愛中学校 二年 太田 叶
おおた かなう

「ダムってなんだろう」

小学生の時、ダムについて学校で習いました。その時はまだダムについてあまり知らず、どんな役割をしているのかも分かりませんでした。話を聞いたあと、ダムについて関心を持ち、気になることもふえたので詳しく調べてみました。

まず、ダムの役割についてです。ダムにも二つ種類があります。一つ目は、治水ダムです。治水ダムは洪水や土石流などからまちを守っています。洪水を防ぐために、川に流れ込む大量の水をダムに一時的に貯め、下流へ流れる量を減らします。また、土石流を防ぐために、土砂が川へ流出するのを食い止めます。そのため、下流の住宅や農地を守る「砂防ダム」の役割もあります。

二つ目は、利水ダムです。利水ダムは水とエネルギーの安定供給を行っています。雨が少ない時期でも安定して水を使えるように、貯めた水を水道水、工業用水、農業用のかんがい水として供給します。また、川の水がなくなつた時に水を流し、動植物の生息環境や川の水質を保ちます。貯めた水が流れ落ちる力を利用してクリーンな電力を生み出す水力発電は、私たちの身近な発電方法です。最近ではダムの広大な水面を利用して、太陽光発電にも取り組んでいます。

日本で有名なダムはたくさんあります。その中でも二つ紹介します。一つ目は、「日本一の高さを誇るダム」として有名な「黒部ダム」です。富山県にある黒部ダムは一九六三年にできたダムです。なん

と地上高は百八十六メートルであり、総貯水量容量は約二億トンにも及びます。この量は東京ドーム約百六十一杯分とも言われていて、とても大きいことがわかります。

二つ目は、「日本一美しいダム」として有名な「白水ダム」です。大分県にある白水ダムは一九三八年に完成したダムです。白水ダムは白いレースのような水流が特徴的です。堤体から流れ落ちる水が、左右の階段状の石積みに沿って白い泡となって流れ落ちる様子が、レースのカーテンのようだと話題になっています。そして、ダムの美しさが国の目に届いたことにより一九九九年に国の指定重要文化財に指定されました。そのためますます人気になり、日本の人気観光スポットともなりました。

ところで、このような重要ダムがなくなってしまうたらどうなるのでしょうか。例えば治水ダムがなくなると、大雨時の洪水被害が激甚化してしまいます。また、利水ダムがなくなると、雨が少ない時に渇水に見舞われます。そのため、生活用水や農業用水が確保できなくなり、電気不足や川の生態系への悪影響があらわれます。ダムは、洪水と渇水の両方を防ぎ、安定した生活を支える機能もあるのです。そんなダムがなくなってしまうたら私たちの地球は滅亡すると言っても過言ではありません。

このように、ダムは山と地球を守るための色々な役割をしているのです。そんなダムがなくなると、私たちのまちにいろいろな被害をもたらします。日本一の高さを持つ黒部ダムも、日本一美しいダムといわれている白水ダムも、日本のヒーローとして山と地球を守ってくれています。だからこそ私たちは安心安全に暮らせているのだと思います。このダムを守るために、私たちにもできることがあると思います。それを考えていくのがこれからの私たちの課題なのではないでしょうか。

生き物のすみかとその環境

和歌山信愛中学校 二年 大中 薫
おおなか かおる

家の間や、田んぼの横をひっそりと通っている用水路ですが、この小さな水の通り道には沢山の生き物が住んでいます。

私の家の近くには用水路が通っています。

私は小学校低学年のころ、父とその用水路にいる生き物を観察することがありました。

私が中をのぞくと小魚が群れになって用水路をびちびちと泳いでいました。私はその小さな魚を「あ、メダカだ。」と目で追っていました。しかし実際にはカダヤシという小魚だと父が教えてくれました。藻をガサガサやると赤いハサミを大きく振り上げるアメリカザリガニを見つけることもありました。また、用水路を上からのぞくと、甲羅干しをしているカメやふくらとしたフォルムの鯉など、さまざまな生物を見ることができました。

しかし、父はわざわざ別の農業用の用水路まで行って、他の種類の生き物を見たりします。ついていってみると、小さくて透명한見た目が可愛らしいヌマエビやそれよりもふたまりほど大きなテナガエビ、用水路の壁にピッタリと張り付いている指くらの大きなサイズのヨシノボリ、ちいさくてころっとしたシジミや黒っぽい色味のメダカなどまた違った種類の生き物を見ることができました。

私の家の近くの用水路にいる生き物のほとんどは厳しい水の環境でも生きてゆける外来種です。一方で細くて小さな用水路では日本固有の在来種がひっそりとくらしているようです。

私の家の近くの用水路は生活排水が沢山流れこんでいて、ヘドロ

のようなものが溜まっていることがあります。そこは今では沢山の外来生物の楽園となっています。私の友人の祖父は「昔はもつと在来種も沢山いたのに。」と言っていました。水の環境が悪くなり、日本固有の生き物の居場所が減ってしまうのは日本に住む私たちとしては少し寂しい気がします。

私たちが用水路の水の環境を変えるためにはどのようなことを行っていけばよいのでしょうか。

流れが止まった場所で、死んでしまった生き物や藻類、泥が積み重なり溜まったものがヘドロになります。なので、私たちは普段から用水路にゴミが溜まらないようにきれいにそうじする必要があります。また、プラスチックなどでできたゴミは分解されず、水の流れを止めてしまったり、汚してしまったりすることがあるので、ゴミはきちんとゴミ箱に入れることが大切だと思います。

私が見たヌマエビやヨシノボリなどの在来の生き物は洗剤などの化学物質に敏感で、時には死んでしまうこともあるようです。このような在来種の居場所を取り戻していくには、用水路に流れこむ生活排水の化学物質を減らしてゆく必要があると思います。

私の家では、皿を洗うときはアクリル毛糸で作ったアクリルたわしを使用しています。アクリルたわしはアクリル繊維の表面が油をからめ取ってくれるため、洗剤を使わずに皿をきれいにすることができのです。このような取り組みを私たち一人一人が意識して心がけることで、町の用水路は少しずつきれいになっていくと思います。

将来、町中の用水路が在来の生き物もたくさん住んでいるような、きれいで安心な住みかになるように、私たちが水の環境を改善していきたいです。

AI技術と水の共生

和歌山県立向陽中学校 二年 宮田 真衣 みやた まい

私たちは水を毎日当たり前のように使っています。水は、私たちの生活には欠かせないとても大切な資源ですが、無限にあるわけではありません。そして、世界にはその水を自由に使えない人たちがたくさんいます。

私は以前、「スラムに水は流れない（ヴァルシャ・バジャージ著）」という本を読みました。その本には、インドのスラム街の人々の生活が詳しく書かれていました。スラムでは水道の設備が整っていないため、安全な水を手に入れることが困難です。水を手に入れるために、長い時間をかけて歩かなければならず、重い水を運ぶ重労働をしなければなりません。それを子供たちがするため、学校に行く時間が無くなって教育の機会が奪われたりすることもあります。また、清潔な水が手に入らず、病気になるってしまうこともあります。安全な水は値段が高く、それを買うことができる人との生活の格差はどんどん広がって、貧しい人ほど水不足の影響を受けていると知りました。私は、水がないことで多くの問題が起きることに驚きました。そして、水を自由に使える自分がどれほど恵まれているのかということも改めて思いました。

最近では、ITやAIの技術を使ってインドのような水不足の地域の問題を解決しようとする取り組みが進んでいるというニュースを目にしました。例えば、センサーを使って水の量や使われ方をデータで管理したり、AIがデータを分析して水不足を予測したりす

ることで、必要な分だけ水を使い、水の無駄を減らす技術が開発されているそうです。また、汚れた水を再利用する技術も開発されており、こうした技術によって、水が不足している地域の問題を解決できると期待されているそうです。

一方で、AIを動かすデータセンターと呼ばれる施設では、大量の電気や水を消費しています。そこでは、大量のコンピューターが常に動いているため、機械が高温になり、それを冷却するために大量の水が使われているそうです。

これから世界中でAIを使う企業が増えると、どんどん使われる水が増え、水の少ない地域では取り合いになるのではないかと思います。私も学校の授業でAIを活用することがあります。私たちが気軽に使っているAIが、知らないところで大量の水を消費していると思うと、便利な反面複雑な気持ちになります。ITやAI技術には水の問題を解決するという面と、水をたくさん使うという面があると思うと、どのようにその技術を活かして使うのか、とても難しいと感じました。技術がどんどん進化しても、また新たな問題が生まれ、完全に問題がなくなることはないような気がします。

結局、世界中の人が水を大切に使うという意識が重要だと思います。個人の節水だけでは無意味にも思えますが、AIでも食べ物でもどんな製品でもそれを作る過程で多くの水が使われていることを知って意識し始めると、消費の行動が変わってくると思います。個人の意識が高まれば、企業や国もそれに応えて大きな力でより良い方向に進んでいくと思います。いろんな技術が発展することで深刻な水不足がなくなり、貧富の差も小さくなって、世界中の生活環境が改善されて、世界がより平和になってほしいです。私は、節水や食品ロスをなくすなど自分の身近なことから水を大切にし、そして世界で起きている水の問題にももっと目を向けていきたいと思っています。

未来へ受け継ぐ水の恵み

近畿大学附属和歌山中学校

一年

森脇 もりわき

大智 だいち

僕は、毎朝炊き立てのおいしいご飯を食べるのが楽しみです。僕の家は、海南市の中野上地区にあります。中野上地区は自然に囲まれていて、農業を営んでいる家も多く、僕の家のお米は、近くに住む祖父が作ったものです。

毎日当たり前のように食べているお米ですが、お米作りには水が必要不可欠です。高野山を水源とする貴志川から佐々の井用水という農業用水路を通じて、祖父の田んぼに水が引かれています。

佐々の井用水は、今から三百年以上前の江戸時代中期に、地元出身の井澤弥惣兵衛という人が工事を行い、貴志川から水を引くことに成功し、長い間水不足で苦しんだ中野上地区の水田を潤しました。僕の先祖は、その頃に中野上地区へ移り住み、お米を作り始めたそうです。

紀州流土木工法の始祖といわれる井澤弥惣兵衛は、海南市内だけでも、亀の川を改修して新しい川を築いたり、県下最大級のため池である亀池の築造を行ったりと、大きな事業を成し遂げました。また、それらの功績が認められて、八代將軍徳川吉宗から関東平野の新田開発のために呼ばれ、埼玉県の見沼代用水など、たくさんの方の水・利水事業で活躍しました。

現在、僕の祖父は、土地改良区の理事長の仕事をしています。土地改良区は、農業を営む人たちの組織で、農地整備や農業用の用水路・ため池の維持管理などを通じて、農業を支えています。祖父が所属する土地改良区にはいくつかの部会があり、佐々の井部会

では、江戸時代から受け継がれてきた佐々の井用水の維持管理を行っています。

祖父に具体的な仕事内容を聞くと、農業用水をそれぞれの田んぼへ適切に届けるために水門を調節し、用水路の泥上げやゴミ処理、草刈りなどを行ったり、水門や用水路を定期的に点検し、必要に応じて修繕を行ったりしているそうです。

さらに詳しく調べてみると、日本の農業用水路の総延長は約四十万キロメートルあり、これは地球十周分に相当する長さで、その水路の大半を全国約四千百の土地改良区が維持管理しているということがわかり、その規模の大きさに驚きました。

しかし、近年は農業を営む人の減少や高齢化により、今までどおりに維持管理の仕事を行うことが難しくなっています。

豊かな水の恵みがなければ、毎日の食事に欠かせないお米などの農作物は育たず、農業は成り立ちません。また、用水路やため地は農業に必要な水を供給する役割だけでなく、洪水を防ぐ機能や防火用水としての機能、メダカやトンボの生息地として、自然環境を保全する機能も果たしており、地域住民の生活に密接な関わりがあります。

中野上地区では、春の美化運動として、毎年自治会で地域の用水路の清掃活動を行っていて、僕の父のように農家ではない人々も参加していますが、そのように、地域住民が土地改良区の人たちと一緒に用水路などを維持管理する活動を継続していくことが大切だと思います。

この作文を通して、今まで何気なく眺めていた用水路の水の流れが江戸時代から受け継がれ、現在も土地改良区や地域住民の努力によつて守られているということを改めて知りました。祖父は、「昔の人たちが残した水の恵みを未来へ受け継ぐ」ために土地改良区の仕事をしていると聞いていましたが、僕も水の恵みを未来へ受け継いでいきたいです。

水から教えてくれること

和歌山県立田辺中学校 三年 岩本 佳樹
いわもと よしき

私たちの生活の中で、水はなくてはならない存在である。朝起きて顔を洗うこと、ご飯を炊くこと、お風呂に入ること、そして喉が渴いた時に飲む一杯の水。普段、私たちは水があることを当たり前のように感じていた。しかし、水は、「人の命を支える恵み」と「時には大きな災害をもたらす恐しさ」の二つの顔がある。

和歌山県では、海、川、山に囲まれた自然豊かな県である。紀の川や有田川、日高川など多くの川が流れ、農業や漁業、そして私たちの生活を支えている。また美しい海岸線も広がり、多くの観光客が訪れる場所でもある。水は和歌山県の自然や文化を育て、人々の暮らしを支えてきた。

しかし、その一方で、私歌山県は昔から水による災害にも見舞われてきた。特に昭和二十八年に発生した「紀州大水害」では、集中豪雨によって県内各地で川があふれ、土砂崩れも発生し、多くの人々が被害を受けた。この災害では県全体で約七三〇人もの死者、行方不明者が出たとされている。さらに平成二十三年には「紀伊半島大水害」が発出し、和歌山県南部を中心に大きな被害が出た。これらの災害は、水の力がどれだけ大きいものなのかを私たちに教えてくれた。

人々は最初、「大丈夫」ということを思うことが多い。しかし、そういう考えをするほど、災害に巻きこまれやすい。近年、線状降水帯による大雨や台風による被害が全国で増えていることを知り、災害は決して他人事ではないと感じた。和歌山県でも大雨への警戒情

報が出されていることがあり、いつ自分たちの身近で災害が起こってもおかしくない。

しかし、和歌山県には、水害から人々を守った有名な話もある。それは「稲むらの火」である。江戸時代、地震が来ることを予想した濱口梧陵が、自分の大切な稲に火をつけ、その火を見た村人たちを高台へ避難させ、多くの命を救いました。この話は今でも和歌山県で語り継がれ、防災の大切さを伝えている。

和歌山県では、こうした災害の教訓を未来に伝えるため、防災教育にも力を入れている。学校では防災について学ぶ機会があり、避難訓練や防災ハンドバックの活用もされている。また、十一月五日の「世界津波の日」に合わせて、防災意識を高める取り組みも続けられている。こうした活動は、過去の災害を忘れず、命を守る行動につながるためにも大切だと思う。

これから私は、家族と避難場所を確認したり、非常用持ち出し袋の準備をしたり、自分にできる防災を少しずつ実践していきたい。そして、和歌山県がこれまで経験してきた水害の教訓を忘れず、水と共に安全に暮らしていける人になりたい。

水は命の源であり、時には試練を与える存在でもある。だからこそ、水を知り、水から学び、水と共に生きることが未来の命を守ることにつながるのだと思う。

水のつながり

和歌山県立向陽中学校 二年 上松 頼幸
うえまつ よしゆき

「ダルビッシュ有水基金」

これは、メジャーリーグで活躍するダルビッシュ有選手が水について考え、活動しているものです。僕が憧れる世界のトップで活躍している選手が長年にわたり、「ダルビッシュ有水基金」という活動を続けているのです。この活動は、ダルビッシュ有選手が試合で勝利を挙げるたびに、途上国の水問題を解決するために寄付を続けている活動です。僕がこの活動を知ったとき、「なぜプロ野球選手が水問題に貢献するのだろうか」と不思議に思いました。なぜなら、プロ野球選手だったら、少年野球の振興や、プロ野球選手を夢見る子どもたちの後押しが一般的だと考えていたからです。

夏の練習、喉は話せないくらいに乾き、水筒に向かって、走り出したくなります。そして、休憩になるとすぐに水を飲み、生き返った感覚になります。このとき、水がないときの怖さが感じられます。スポーツ選手にとって、水はプレーを支える「生命線」です。しかし、僕達にとったら当たり前に手に入る水が世界のどこかでは、ダイヤモンドよりも価値のある物になっていることを、ダルビッシュ有選手の行動と言葉で気付かされました。

ダルビッシュ有選手がこの活動を始めたきっかけや、水が不足している地域の現状を知るうちに、僕は、水への考え方が少しずつ変わっていききました。世界には、不衛生な水しか飲めないことを理由に命を落とす子どもたちが大勢いることなど、自分が蛇口を捻っている間も水が欲しくて、苦しんでいる人々がいることを改めて知りま

した。僕は、胸を打たれました。

練習後、僕は、汚れた手と顔を洗っていました。友達と話しながら洗っていると、話に夢中になり、十秒くらい水が無駄に流れていました。その時僕はダルビッシュ有選手の言葉を思い出しました。今の十秒で流れていた水で何人かの命を救えたかもしれない、そう思うと、胸が痛くなりました。自分が生まれた場所が水を手に入れるために何キロも歩かなければいけない地域だったら。今、こうして大好きな野球ができていないかもしれない。「水」というのは、体を健康に保つだけではなく、環境を保つていくために大切なものだと気づきました。

水がなければ、グラウンドの整備もできない。熱中症を防ぐことができない。ユニフォームを洗うことができない。僕の人生に大きく関わってるところにすごく怖さを感じました。そう考えると、蛇口をひねると出てくるのが当たり前の水がすごく尊いものに見えてきました。自分は、水を一適も無駄にしないことから始めるのがいいと考えました。

ダルビッシュ有選手の活動は、単なるお金を送ることだけではないと思っています。ダルビッシュ有選手のような影響力のある人だからこそ、僕みたいな人に目を向けられ、生活を見直すきっかけにもなっている。本当の支援とは、このようなものなのかなと感じました。僕にはダルビッシュ有選手みたいな資金力はないけれども、意識を変えていくことはすぐにできます。一秒の無駄な水でも、止めれば人の命を救えるかもしれない。そう思い「節水」ってとても大事なんだなと驚きました。ダルビッシュ有選手にとって、登板して勝つことで、支援できているけれど、僕にとっての登板は、日頃の意識から始まると思います。日々の登板を大切に、意識を高めていくことが大切なのです。

水の大切さを感じた時

開智中学校 二年 岡 凜太郎
おか りんたろう

水を大切だと感じたことは、それまでほとんどなかった。風呂やシャワー、ご飯の支度、洗濯や掃除など、日常のさまざまな場面で水を使っている。しかし、そのありがたさを実感することはほとんどなかった。蛇口をひねれば当たり前のように水が出てくる生活に慣れきっており、水がなくなる状況を具体的に想像することもなかったのだと思う。むしろ、水はいつでも使えるものだと考え、時には無意識に無駄遣いしてしまうことさえあった。

しかし、平成三十年八月二十八日、台風二十一号が接近したとき、私は初めて水の大切さを身をもって知ることになった。この台風では、木が倒れ、電柱がなぎ倒されるなど、地域全体が大きな被害を受けた。その影響で停電と断水が発生し、普段当たり前に使っていた電気や水が一切使えなくなってしまったのである。特に印象に残っているのは、電気と水が同時に使えなくなったことの不便さである。その日は夏の暑い日で、家の中は蒸し暑く、不快な空気に包まれていた。そんな状況にもかかわらず、エアコンや扇風機が使えないだけでなく、冷蔵庫も止まり、食べ物を冷やしておくことすらできなかった。

普段いかに電気に頼って生活していたかを痛感した瞬間だった。そして同時に、水の大切さも強く感じるようになった。まず最初にくつたのは、飲み水である。夏で喉が渇きやすい時期であつたにもかかわらず、水道から水が出ないため、自由に水分を取ることができなかつた。これまで当たり前のように飲んでいた水が、こんなに

も貴重なものだったのかと驚かされた。その後、家では水の確保がどうにもならず温泉施設へ行くことにした。しかし、そこでも多くの人が水を求めて集まり、売店では飲料水がすぐに売り切れてしまっていた。水が手に入らないという現実に直面し、不安な気持ちがさらに大きくなったのを覚えている。

次に困つたのは、お風呂やシャワーが使えないことである。汗をかいても流すことができず、不快感は時間とともに増していった。普段であれば何気なく入っているお風呂も、水があつてこそ成り立っているのだと実感した。また、トイレや手洗いといった衛生面でも水が使えないことは大きな問題であり、日常生活がいかに水に支えられているかを思い知らされた。さらに、料理や洗い物にも支障が出て、普段の生活がいかに水に依存しているかを改めて感じた。

こうした一つ一つの不便が積み重なることで、水の存在の大きさがより鮮明に浮かび上がってきたのである。この経験を通して、私は水が単なる生活の一部ではなく、生活そのものを支える重要な存在であることを強く認識した。それまでは無意識に使っていた水も、実は多くの人の努力によつて支えられている貴重な資源である。

水が使えない状況を経験したことで、その一滴一滴の価値を真剣に考えるようになった。今では、蛇口をひねれば水が出るという当たり前の環境が、決して当たり前ではないと理解している。そして、水を無駄にしないよう意識し、日常生活の中でも節水を心がけるようになった。また、災害に備えて飲料水を備蓄することの大切さにも気づいた。今回の台風の経験は大変な出来事であつたが、水や電気のありがたさを学ぶ貴重な機会でもあつた。この経験を忘れず、これからも水を大切に使い続けていきたいと思う。

日本の水と世界の水

和歌山県立向陽中学校 二年 木村 優月
きむら ゆづき

「水です。」

と言って、店員さんがテーブルに水を置いてくれた。この頃の私は、この水の存在を「当たり前」以外なにも思わなかった。喉が渴いた時に飲むもの、ただそれだけであった。

ある日、私は家族で家の近くにあるレストランへ行った。レストランに入ると、

「水、無料提供」

この言葉が視界に入った。だが、私は一瞬でその言葉から目を離した。理由はただ一つ。ほとんどのお店が水を無料提供しているからだ。お店に限らず、家では蛇口をひねれば水が出てきて、水道水も飲むことだってできる。だから、なにも感じない。私だけではなく家族も他のお客さんもほとんど全員だったと思う。私たち日本人にとっては、水があること、無料提供してくれることが当たり前である。でも、それは「日本人にとっては」だった。

私はレストランから家へ帰り、動画を眺めていた。次の動画へスワイプした時、ある外国人の動画が出てきた。

「日本に訪れた時のレストランが衝撃的だった。私たちの国のレストランは水の無料提供が存在しないので、最初は無理やりお金を払わせてようとしたと思う、焦った。だが店員さんに聞いてみれば無料だと言われて、日本のすごさを知った。」

という内容であった。私は動画を見た時、この外国人以上に驚いた。私にとっては水の無料提供はどの国でも当たり前だと思っていたので、日本と外国の違いの一つが「水」であることは驚きでしかなかった。

私は動画を見終えた後、世界の水について気になり、調べてみることにした。「世界の水」と調べると、日本ユニセフ協会のサイトが出てきたので、サイトを開くと画面に

「二〇二四年時点、世界では二十一億人が安全に管理された飲水を利用できず」

という文が書かれていた。私はさらに衝撃を受けた。そしてこの文から、そもそも世界では水の無料提供をする以前に、安心して飲むことができる水を飲めていない人が世界にはたくさんいることを知った。そうならば、私が家の蛇口をひねった時に安全に管理された水を飲めていることも、その水をお店で無料提供してもらえていることも、すごいことであり、世界の人々からすると羨ましく、驚きのことでしかないのではないかと考えた。

さらに調べると、アフリカの水が原因で一日に何百人という子供が亡くなっているということも知った。私はこんなにも恵まれているのだと思うのと同時に、今まで何も思わずに水を飲んでいたことを後悔した。食事をする前と後に感謝の気持ちを込めてあいさつをするように、水にもそれと同じくらい感謝しなければいけなかった。それなのに、私は今まで何も思わずにただただ飲んでいた。恥ずかしかった。だからこそ、これからは「水」という存在に感謝したいと思うようになった。

今、私たちが水を安心して飲め、毎日を生きられていることは当たり前ではない。このことを学ぶ機会に出会えたから、水への感謝と世界の水問題の解決策を考えることはずっと忘れずに、実行していきたい。

日々の水への感謝

和歌山県立田辺中学校 二年 島本 彩葉
しまもと いろは

水なんて、味のない飲み物。小学校での教室で、一人の女子がそう言った。異論をはさむ者は、誰一人いなかった。

まず、みなさんは「水ってどんな味ですか。」と質問されると答えることはできるだろうか。ほとんどの人は、先ほども言ったように「味がない。」と答えるであろう。だが、実際味を意識して飲んでみると、「味がない」とは実はない。どんな水であっても、必ず味はある。

私が実際に、水に味があるということに気づいたときは中学一年生になったばかりの頃だった。体育中に冷水機の方に行き、私が友達に、「水ってさ、味せんよね。味しない水置いてても意味くない？味ないからさ。冷茶機ならよかったのにな。」

と言うと、友達は驚いた顔をしてこう言った。

「あー、味にこだわり持ってる系なんや。」

私は頭の回転がピタッと止まった。逆に味にこだわりの持たないことに驚きを隠せなかった。例えば、パッケージやペットボトルのラベルなどの見た目が良くてまずい飲み物と、見た目が最悪でその分美味しい飲み物があったとする。多少分かれるかもしれないが、どちらかと言えば見た目を捨てた分、美味しい飲み物を選択する人の方が多いと私は思う。このように、味を何より優先するタイプだから正直に言うのと、友達の言っていることの意味が分からなかったのだ。そのため、

「こだわりの持たないのはなんでなん？」
と聞いた。すると友達は、

「昔、親に、『水の味にこだわるのはやめなさい。美味しいまずいがあるの

はわかってる。でも、世界には美味しくない水すら飲めない人たちがおる。それをしっかり理解した上で水を飲むことを心がけよな。』って言われて今に至るってわけよ。」

と長々と語ってくれた。私はこの話を聞いて、確かにと思ってしまった。

その日の夜、私は水について調べてみることにした。驚いたことがたくさんありすぎた。まず一つ目は、水道水をそのまま飲める国は十一から十五カ国しかないということ。私たち日本人は、「そのまま水道水を飲む」という行動が当たり前である。だから、世界の問題に気付くのが遅かったのだろうか。調べてから、かなりこのことが謎のモヤモヤとして私の心の中にとどまっていた。そのモヤモヤの中には、今まで水がどうこう言っていた自分が恥ずかしく思えてきたのと、水を飲むことができない国の人たちへの申し訳なきが入り混じったものだった。

翌日、友達に水の大切さを知ったことを報告しに行った。

「味がどうじゃなくて、水が飲めている時点で感謝しないとダメってこと、おかげで知れた。」

と言うと、君ならわかってくれると思ったよ、と言ったかのようにニコニコしてゆっくりうなずいてくれた。その時、私はもっと早く知リたかったけど、やはり今のうちに知れてよかったというなんともいえない複雑な感情を抱いていた。

この出来事をきっかけに、私は水に対する想いが変わった。前までは味がない、お茶の方がいい、冷水機なんてただの水、などと、かなり言い放題だった。でも友達から教わった日の夜から考えが、「水があるということに感謝をしないといけない」というものに変わった。あれから一年経った今でも、その思いは変わらない。水を飲んでる時に、いつも「ありがとう。」と言っている。いつも喉を潤してくれてありがとう。これからもよろしくね。

当たり前を大切に

和歌山県立田辺中学校 二年 竹内 日和乃
たけうち ひな の

暴走族を見ると「うるさい。」よりも「お金持ちやな。」という考えが、私の中では先に来るようになった。昨今、原油の価格高騰によりほぼ全ての家庭で生活が以前より圧迫されたことだろう。近所の飲食店も例にもれず、一部のメニューが値上がってしまった。仕方のないこととは分かっているが、なんとも悲しいことである。

このように原油は、値段が上がると日々の生活に大きな影響を及ぼす、とても重要なもののだと、改めて考えさせられた。そんな中、私は考えた。これが水であつたら、世界はどうなるのだろう、と。もちろん、先ほど述べたように原油は、現代文明には欠かせないとても大切なものだ。だがしかし、「明日どちらかが世界から消えるとすれば」と聞かれると、ほぼ全人類が水を残すと言うだろう。それくらい、水は生物の存続に欠かせないものである。ではその水は、原油のように供給不足になることはないのだろうか。

だから私は、今世界で起きている水不足問題について調べてみることにした。すると、二千二十四年時点で、世界人口の約四分の一が、安全な飲み水を口にできていないという情報が飛び込んできた。

「そんなに深刻なんや。」
思わず言葉が漏れた。いくら水不足といっても、自分の中で水に困ったこととはほとんど無かったため、そこまで問題ではないだろうと思っていた。つまりは、すぐそこに水があるという環境を当たり前にしていたのだ。だが、その当たり前は、世界のどこにでもあるものではないようだ。調べれば調べるほど、自分がいかに水に甘やかされた環境で生きていたのかを思

い知らされる。

さらに皮肉なことに、地球の約七十パーセントは水でできている。それなのに、水不足になっている。不思議に思い、調べてみると、そのほとんどが海水であり、人間がそのまま使える淡水は、わずか二・五パーセントしかない、と出てきた。つまり、目の前に大量に存在しているのに、それをすぐに使うことはできないという、なんともどこかしら状況なのである。そして、水不足は単なる「喉が渇く問題」では終わらない。農業に使う水が減れば、作物は育たない。作物が育たなければ、食べ物が減る。食べ物が減れば、価格が上がる。どこかで見た流れである。そう、原油と相似しているのだ。ただし違うのは、水は代わりがきかないという点だ。原油は他のエネルギーで補える可能性があるが、水の代わりになるものは、少なくとも今のところ存在しない。

ここまで考えて、ふと最初の話を思い出した。暴走族のバイクの音に対して、「ガソリン代すこそうやな、お金持ちや。」と感じたあの瞬間だ。もし同じように、「あの人、毎日きれいな水を使ってるなんて相当お金持ちやな。」と思う日が来たらどうだろう。笑い話のようでいて、決して空想の話とはいえない気がする。

結局のところ、私たちは「失ってから気付く」生き物なのかもしれない。原油の値段が上がって初めて、その重要性に気付いたように。水もまた、本当に不足して初めて、その価値を痛感するのだろう。しかし、それでは遅すぎる。

だからせめて、手近なことくらいは意識してみようと思う。歯を磨くときの水を出しっぱなしにしないとか、シャワーの時間を少し短くするとか、そんな些細なことを、もしかすると、その些細なことを積み重ねられるかどうか、未来の「当たり前」を守るかどうかの分かれ道かもしれないのだから。

産業と水

和歌山県立田辺中学校 二年 中山 明衣 なかやま めい

ある日、私はテレビ番組を見て、紙を作るためには大量の水が使われていることを知った。紙は水にぬれると破れたり使えなくなったりするため、これまで私は紙と水はあまり関係のないもの同士だと思っていた。そのため、水が紙づくりに深く関わっていると知ったとき、とても驚いた。そして、このことをきっかけに、私たちの身の回りには、ほかにも水が使われている製品がたくさんあるのではないかと思い、調べてみることにした。

まず調べて分かったのは、プラスチック製品にも水が使われているということだ。プラスチックは、原料を高い温度で加工して形を作るが、その過程で冷却水として水が利用されている。私はそれまで、水は飲んだり、手や物を洗ったりするために使うというイメージが強かった。しかし、熱を持ったものを冷やすという役割も果たしていること知り、水にはさまざまな使い道があるのだと改めて気づいた。そして、水は私たちが思っている以上に多くの場面で活躍している、不思議で重要な存在だと感じた。

さらに調べていくと、スマートフォンやパソコンに使われている半導体の製造にも、水が欠かせないことが分かった。半導体はとても精密な部品で、目に見えないほど小さなごみでも付着すると正常に動かなくなってしまう。そのため、「超純水」と呼ばれる特別にきれいな水で、何度も洗浄する必要があるという。私はこれまで、機械に水がかかると壊れてしまうというイメージがあったので、その機械の部品を作る過程で水が使われているという事実を知り、とても意外に思った。同時に、水は使い方によってはとても繊細な作業を支えることもできるのだと知った。

私は、生活に欠かせないさまざまな製品がその製造過程で水を使ってい

ることが分かった。紙やプラスチック製品もスマートフォンやパソコンも、私は毎日のように使っているものである。しかし初めは、それらが、作られたときに水を使っていたことは知らなかった。そのため、私たちは水を飲み物として飲んだり、物を洗ったりするだけでなくこうした製品を通して水と深く関わっているということを知れてよかったと思った。

また、物以外に、食べ物を通して水と深く関わっている。例えば、肉牛に関しては、牛が飲む水だけでなく、エサとなるトウモロコシなどを育てるためにも膨大な水が必要である。

このように、水は私たちの生活に欠かせない資源である。だから、水という資源は大切に守っていかなければならないと思う。製品や食べ物が手元に届くまでに使われた水のことを「バーチャルウォーター」と呼ぶそう。意味は「目に見えない水」である。私はこの言葉を知ったとき、物を大切に使ったり、食べ物に感謝したりすることは、水を守ることに繋がっているのだと思った。これからは、身の回りの物一つ一つを無駄にしないように心がけていきたい。水を大切にする行動を自分なりに続けていきたいと思う。

私が知った水の大切さ

和歌山県立向陽中学校 二年 養屋 風夏
みのや ふうか

私は「水紛争」という言葉を知ったことで、水について深く考えたことがあります。そのきっかけは、中学一年生の授業でした。

私は、授業の一環で水についての問題を調べていました。パソコンで、調べていると下のほうに水紛争というワードが出てきました。

「え、水紛争？」その時の私は、水で戦うのか、水による戦いなのか全くわかりませんでした。そこで、私は水紛争について調べてみました。すると、国家間や地域間などで起こっている水を巡る戦争ということがわかりました。日本では、蛇口をひねれば水が出る、ボタンを押せばお風呂をためたり、トイレを流すことだってできます。水はいつだって簡単に取ってなにかたたくさんあるものという認識がその時の私にはありました。そして、ニュースでも取り上げられているところを私は見たことがなく、その授業のときは、あまり気にもとめず、深く考えませんでした。

けれど、家に帰っても、水紛争という言葉が頭にありました。なぜ、争いが起きるのか？地球にはそんなに水がないのか？など、疑問が湧き上がってきました。そこで私は、スマホで気になったことを調べてみることにしました。すると、国際河川など、他の国などと共有して、使う水の資源を巡って争うことや、地球上で簡単につかうことができる水は、0.01%ということが分かってきました。近年では、人口増加や技術の発展により水の消費量が増えていることは、私も知っていました。でも、世界の何処かで水を巡る戦争が起きているなんて知りませんでした。それほどまでに、水不足は深刻ということがわかりました。このときに私は、「水は有限でとても大切なのだ」ということを認識しました。それと同時に、

この戦争や水不足で苦しんでいる人がいるということに胸が痛みました。

その時、私が小学生の頃に、断水を経験して大変な思いをしたことを思い出しました。私は約一週間ほど蛇口から水が出ない生活を送りました。学校に給水車が来て、水をもらうことができたが、たくさん人が並んでいて、とても疲れました。一番心配だったのが、飲み水です。どこのお店に行っても水が売っていないくて、苦労したのを覚えています。私の家には、ニリットルのペットボトルの箱が何箱もあったので、一週間ぐらいはなんとか持ちこたえることができました。普段通りに水を使うことができなかったのも、トイレやお風呂、洗濯も一苦労で、精神的にも身体的にも辛かったです。私は少しの期間でしたが、水が足りない国では毎日もっと辛い生活をしている人もいるということに気づきました。

今回のことで、私達人間が生活していくのに水は必要なもので、とても大切で有限であるということを知ることができました。私が経験した断水から、水が足りない国ではもっと辛い思いをしている人たちがいるということに気づくことができました。この大切で有限な水を無駄にしないように常日頃、節水を心がけていくことが必要だと思います。また、日本では、蛇口をひねれば簡単に水が出るため、気づきにくい水の大切さを多くの人に知ってほしいです。そして、水が無限にあるという当たり前が、有限であるという事が当たり前になるようになってほしいと思います。

水の大切さ

近畿大学附属和歌山中学校 二年

宮崎 みやざき 紗那 さな

二〇二一年十月三日、和歌山市紀の川に架かる水管橋の一部が落橋し、紀の川の北側の六万世帯で断水が発生しました。私は紀の川の北側の地域に住んでいたため、断水の被害に遭いました。ここで実際に水が使えなくなつて困つたことや、感じたことなどを紹介していきたいと思います。

一つ目はお風呂です。水が使えないため、お風呂に入ることができず、遠くにある銭湯まで行くのがすごく大変だったのを覚えています。

二つ目はトイレです。トイレの水を流すことができなかったのも、前もつてお風呂にためておいた水をバケツにくんで排泄物を流していました。すごく不便だと思いました。

三つ目は飲み水です。飲み水は、家の近くのスーパーで売られているペットボトルを箱買いしたり、給水車の水などを使いました。給水車の水をもらうために、大勢の人たちが並んでいたのを覚えています。

四つ目は洗い物です。洗い物を減らすためにお皿にラップをしいて食べ物を置いていました。

このような経験を経て、水は生活していく上ですごく大切なものだということを改めて学ぶことができました。今回は短期間でしたが近々おきると言われている南海トラフがおきるともつと長い期間水がとまってしまうのではないのでしょうか。実際に東日本大震災では五十七パーセントは一週間で復旧したものの復旧困難地域を

除いた最長断水期間は七か月間であつたそうです。長い期間断水になつてもいいように私たちは前もつてどのような対策ができるのでしょうか。

調べてみたところ、二つありました。

一つ目は水の汲み置きを用意することです。ポリタンクなどに水道水を汲み置いておくと、いざというときにさまざまなシーンで活用することができるようです。

二つ目は給水所を調べておくことです。各地域には災害発生時の断水に備えて、飲料水を溜めておく給水所が用意されています。万が一に備えて、自分の家から近い給水所を把握しておくとういことです。

また、飲料水や食料、非常用トイレや給水タンク、ラップや水を使わない衛生用品なども断水に備えて揃えておくとういことです。

このように対策をすることで断水がおきてしまつてもあわてずに済むのではないかなと思いました。

水は生活していく上でなくてはならない大切なものです。普段あたり前のように使っている水ですが急に使えなくなってしまうことも十分あります。なので日頃から先程述べたような対策をとり、日頃から備えておくことが大切だと思います。なので私も備えようと思うし、みなさんも改めて水の大切さについて考え、備えてみてはいかがでしょうか。

水の大切さと私たちの生活

海南市立亀川中学校

三年

わたなべ
渡邊かりん
夏梨

私たちは日常生活の中で水を当たり前のように使っていますが、改めて水の大切さについて考えると、決して当たり前ではないことに気づきました。

私はこれまで、水を特に意識せずに使っていました。朝起きて顔を洗い、学校から帰れば手を洗い、夜にはお風呂に入る。その一つ一つの行動の中で水は欠かせない存在であるにもかかわらず、水がどれほど貴重なものかを考えたことはほとんどありませんでした。また、歯みがきやシャワーで水を無駄に使っているという自覚もありませんでした。

しかし、ある時家族に水の使い方について注意されたことがありました。そのときは正直、少しくらいなら問題ないだろうと思っしまい、あまり深く考えませんでした。その後、たまたまニュースで世界の水問題を見かけ、自分の考えは大きく変わりました。

世界には、安全な水を自由に使うことができない人が多くいることを知り、私はとても驚きました。遠くの井戸や川まで水をくみに行かなければならない地域や、汚れた水を使い、病気になるという人々がいるという話を知りました。日本では蛇口をひねればきれいな水がすぐに出てくるのが当たり前になっていますが、それはとても恵まれた環境であると感じました。

さらに、日本でも水は無限に使えるわけではないことを知りました。雨が少ない年には水不足が起こり、実際に取水制限が行われた地域もあるそうです。また、私たちが日常生活で流している生活排

水が、川や海の水質を悪化させている原因の一つになっていることも知りました。自分たちの生活が知らないうちに環境に影響を与えていると知り、驚くと同時に責任の重さを感じました。

これらのことを学んでから、私は自分の水の使い方を見直すようにしました。歯みがきをするときには水をこまめに止めるようにし、シャワーの時間もできるだけ短くするよう意識する。また、食器を洗う時にも水を出しっぱなしにしないように気をつける。些細なことでしたが、今では一つ一つが大切な行動だと思えるようになりました。

また、水を大切にすることは、ただ節水するだけではなく、水を汚さないことも重要だと考えるようになりました。例えば、洗剤を必要以上に使わないことやゴミをきちんと分別することも、水環境を守ることに繋がります。こうした行動は一人では小さなものかもしれませんが、多くの人が意識すれば大きな効果になると思います。

今回の体験と学習を通して、私は水が限りある大切な資源であることを実感しました。そして、これまで当たり前だと思っていた生活が、実は多くの恵みに支えられていることにも気づいたからこそ、これからは水を無駄にしないように意識し続けていきたいです。

また、自分一人だけでなく、周りの人にも水の大切さを伝えていくことが大切だと思います。家族や友達と話し合ったり、学んだことを共有したりすることで、より多くの人が水について考えるきっかけになるのではないかと思います。

これからも水を大切に使う意識を忘れずに生活していきたいです。また、日常の小さな行動も積み重ねて水を守っていききたいと思います。

第48回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第50回「水の週間」の行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

1 応募要領

- ①テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
- ②対象・・・中学生（中学生と同じ年齢の方を含む。）
- ③原稿枚数・・・400字詰め原稿用紙4枚以内、日本語で表記された個人作品に限る。
題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入する。
- ④あて先・・・和歌山県庁 地域振興課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL 073（441）2371
- ⑤応募期間・・・令和8年5月8日締切り
- ⑥版 権 等・・・○応募作文は自作の未発表のものに限る。
○応募作品の著作権は、主催者に帰属する。
○応募作文の返却は行わない。

2 応募結果

応 募 学 校 数	応 募 総 数	学 年 別		
		1 年	2 年	3 年
校	編	編	編	編
7	655	184	408	63

3 審 査

和歌山県審査において、優秀賞3編、入選5編、佳作10編あわせて18編の入賞作文を決定。

（協 力 和歌山市中学校国語教育研究会）

4 表 彰

（1）賞および賞品

賞	賞 品
優秀賞	賞状、図書カード
入 選	賞状、図書カード
佳 作	賞状、図書カード

（2）表彰式

優秀賞の受賞者を令和8年8月4日、和歌山県庁において表彰

